

## 日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員  
上野 正博

### 神馬藻

ホンダワラの仲間、万葉集の歌にもたくさん登場します。本州より南の日本沿岸で一番目立つ大形海藻。玉藻の塩漬はそれなりに大きくなる。3倍以上の大きさになります。大きな体を海の中で立てるために、浮き袋(気胞)をたくさんつけたホンダワラ科の海藻。玉藻の塩漬はそれなりに大きくなる。3倍以上の大きさになります。大きな体を海の中で立てるために、浮き袋(気胞)をたくさんつけたホンダワラ科の海藻。

丹後の海に、地元で「ジンバ」と呼ばれる海藻が大きく始まり、功皇后が疲れた馬に食べたところ元気がなくなったという故事にちなんで神馬藻(じんばそ)を省略したものと、ホンダワラが正式な和名ですが、北陸から山陰にかけてはジンバと呼んでいたり、江戸時代の新潟に暮らしていた良寛さんも、お正月に神馬藻を送ってもらったお礼の和歌を残しています。

葉の間に気胞と呼ばれ、小さな卵形の浮き袋(気胞)をたくさんつけています。この浮き袋を俵に見立てて「穂俵」と呼び、お正月の鏡餅に添えたのが、いつの間にかホンダワラと訛ったようです。

実は神馬藻とか穂俵と呼ばれ、鏡餅を飾るようになってからつけられたようなので、万葉の昔、ホンダワラは玉藻(たまも)と呼ばれていました。

浮きを玉に見立てたので、玉藻は当時重要な海産物だったからか、

万葉集の歌にもたくさん登場します。本州より南の日本沿岸で一番目立つ大形海藻。玉藻の塩漬はそれなりに大きくなる。3倍以上の大きさになります。大きな体を海の中で立てるために、浮き袋(気胞)をたくさんつけたホンダワラ科の海藻。



浮き袋(気胞)をたくさんつけたホンダワラ科の海藻

天皇の食材を供給する御食国(みけつくに)だった若狭からたくさん運ばれた記録が、平城京跡から出土する木簡に記されています。その中でも鉄の大釜が使えれば、海水を煮詰めるのもそれほど難しくありません。でも、土器が中心だった万葉の時代やそれ以前では、海水を煮詰めて乾燥した塩を作るのは大変。そこで考え出されたのが藻塩。使うときに真水を注ぎ、上澄みをとれば灰の化学作用で不純物や苦汁(にがり)も除けるので、灰と塩の混ざった物が都に運ばれたのではないのでしょうか。